

小田原の遺跡探訪シリーズ6

# 国府津三ツ俣遺跡

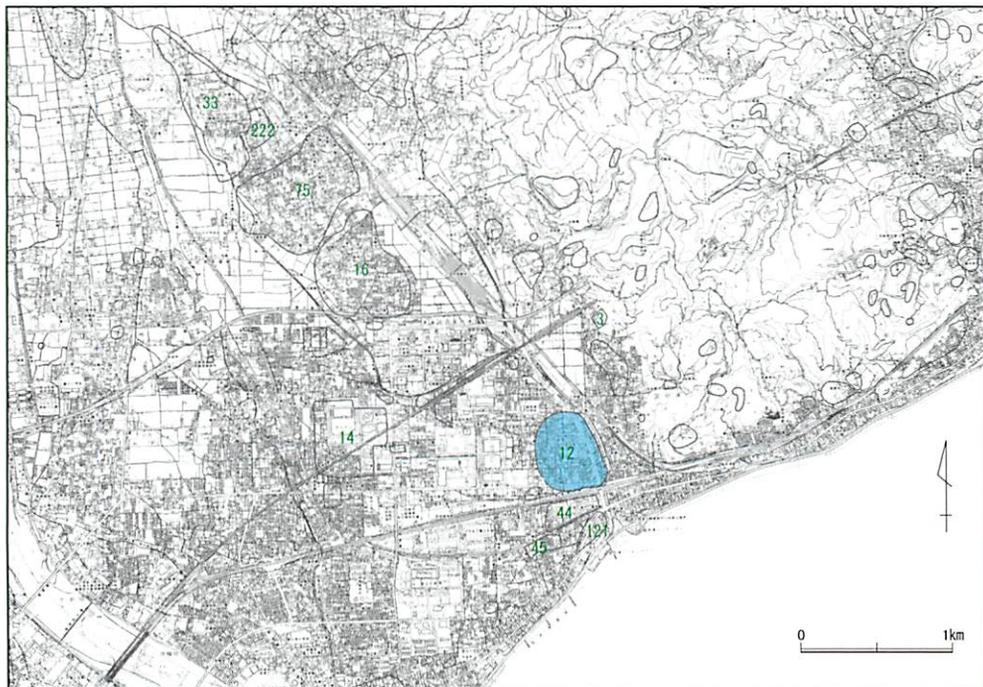
— 相模湾をのぞむ集落遺跡 —



小田原市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第 6 号として、小田原市国府津字三ツ俣ほかに所在する国府津三ツ俣遺跡（小田原市No.12 遺跡）を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成 22 年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用公開事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）  
御堂島正・伊丹徹（神奈川県教育委員会）、小池聡（株式会社盤古堂）、神奈川県教育委員会
- 4 本書の作成は、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課渡辺千尋が担当者となり、同課大島慎一・小林隆・土屋了介・吉田千沙子・山口剛志・佐々木健策が補佐しました。本書の構成には田尾誠敏の協力を、図版の作成には禹智瑛・杉山弘美・鷲頭一枝の協力を得ました。



第 1 図 国府津三ツ俣遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

[表紙] 国府津三ツ俣遺跡第Ⅺ地点石組遺構（山本ほか、2000）

[裏表紙] 国府津三ツ俣遺跡第ⅪⅠ地点出土土器

# I 森戸川低地の遺跡

## 1 国府津三ツ俣遺跡と周辺の遺跡

国府津三ツ俣遺跡(小田原市No.12 遺跡)は、足柄平野の南東側、大磯丘陵の西を流れる森戸川下流域の右岸に位置しています(第1図)。森戸川の右岸には、すでにこの遺跡探訪シリーズでもご紹介してきたように、小田原市内でも屈指の遺跡群が広がっています。千代台地と呼ばれる小高い丘とその周辺に広がる永塚遺跡群(No.33 遺跡)、下菅我遺跡(No.222 遺跡)、千代遺跡群(No.75 遺跡)、高田遺跡群(No.16 遺跡)では、多くの調査の積み重ねによって、小田原に暮らした人びとの生活の様子が明らかにされてきています。

本書で取り上げる国府津三ツ俣遺跡は、国府津小学校や消防署東分署周辺の、南北約500m×東西約450mの範囲に広がっていると推定されています。東側は大磯丘陵と丘陵に沿って流れる森戸川、西側は酒匂川の作り出した広大な低地、南側は相模湾に面しており、遺跡周辺は変化に富んだ地形になっています。標高はおおよそ6~7m、相模湾の現在の海岸線までは直線距離で500mほどの森戸川下流域に広がる低地に位置しています。

国府津三ツ俣遺跡の周辺には、JR東海道本線を挟んだ南側から国道1号線にかけての範囲に、町畑遺跡(No.44 遺跡)、小八幡東畑遺跡(No.45 遺跡)、小八幡中沢遺跡(No.121 遺跡)などが位置しています。各遺跡ともあまり調査事例は多くありませんが、弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物が検出されています。国府津三ツ俣遺跡と一連の遺跡が広がっていたと考えるほうが良いのかもしれませんが。

また、西1.5kmほどに位置する中里遺跡(No.14 遺跡)は、弥生時代中期の集落と墓域がセットで確認され、東日本における最初の本格的な水稻耕作集落として注目を集めています。

先に挙げた千代台地の遺跡群には、奈良・平安時代になると寺院や郡の役所である郡家が造られたと考えられています。国府津三ツ俣遺跡とそれらの遺跡群とは、森戸川を介して深い関わりがあったことが推定されています。

北東750mほどに位置する瀧之前遺跡(No.3 遺跡)では、古代の水場遺構や土器捨て場から多量の遺物が検出されています。

## 2 発掘調査の軌跡

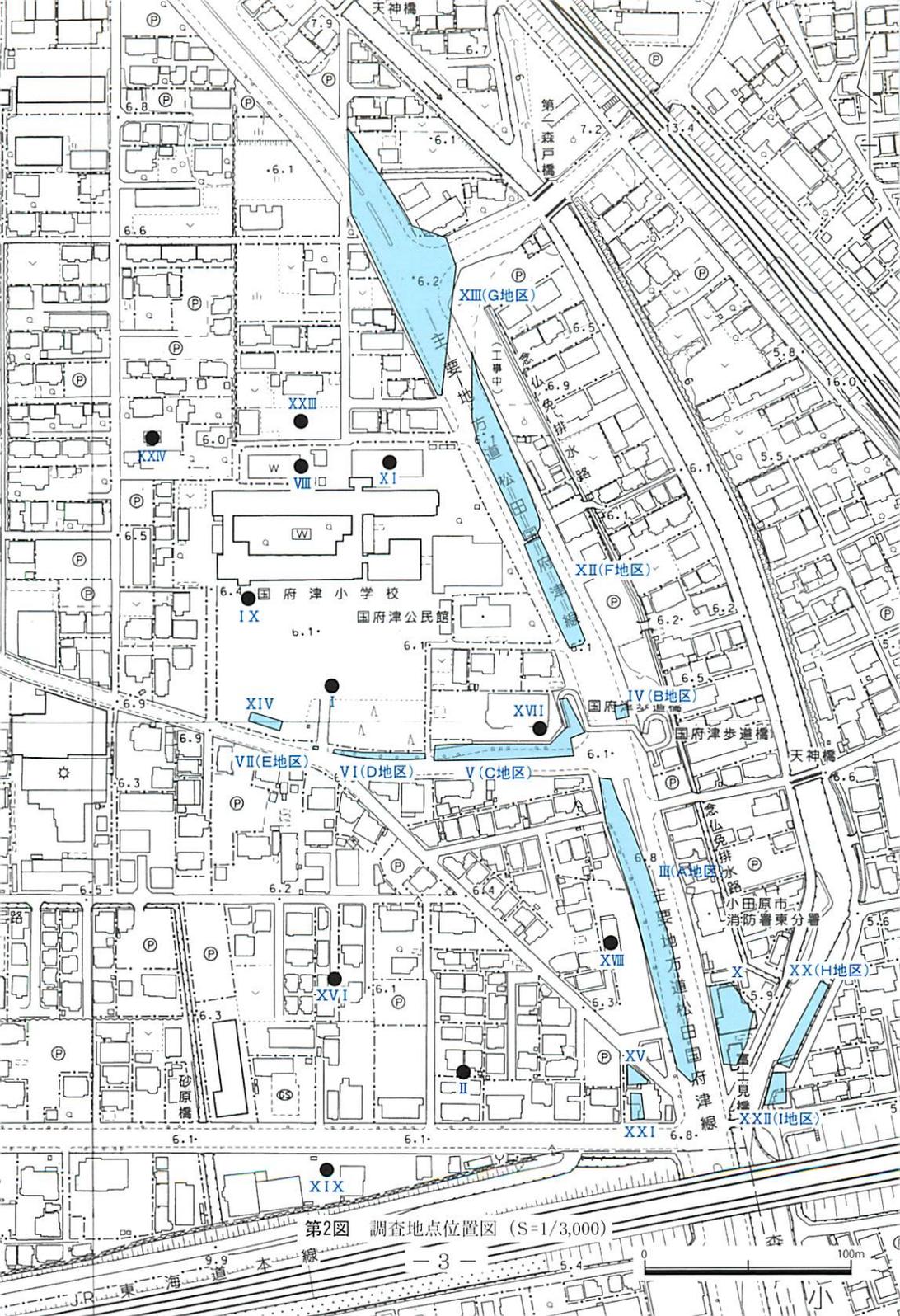
国府津三ツ俣遺跡は、2011年2月までに24地点で本格的な調査が行われています（第2図：この中には、大字小字名から国府津<sup>しもねんぶつめん</sup>下念佛免遺跡の名前で報告されている地点も含まれています）。

国府津三ツ俣遺跡で最初に調査のメスが入ったのは、1980（昭和55）年に国府津小学校の校庭で排水施設を埋めるための溝を掘削していた際、遺物が発見されたことがきっかけでした。この第I地点の調査では、調査範囲が狭かったこともあり、明確な遺構は確認されませんでした。古墳時代～奈良・平安時代の土器が出土し、国府津三ツ俣遺跡の内容を垣間見せるものでした。

国府津三ツ俣遺跡で比較的規模の大きな調査が行われたのは、1983（昭和58）年から実施された第Ⅲ～Ⅴ地点の調査になります。この都市計画道路の改良工事に伴う調査は、その後 1997（平成9）年まで断続的に発掘調査が行われました（第Ⅵ・Ⅶ・ⅩⅢ・ⅩⅣ地点）。調査が行われた場所は、国道1号線の親木橋交差点から県道を北に進み、JR東海道本線のガードをくぐった富士見橋際交差点付近から、国府津小学校の校舎東



写真1 昭和59年調査時の遺跡全景（北東から）（神奈川県教育委員会提供）



第2図 調査地点位置図 (S=1/3,000)

側を通り過ぎた先の第一森戸橋西側交差点先までのおよそ500mの区間と、国府津歩道橋から国府津小学校正門前までのおよそ160mの区間になります。結果的に遺跡を東西南北方向にそれぞれ縦断するように調査区が設定されたため、遺跡の範囲や土地利用の違いを考える上で、大変成果の多い調査となりました。

この間、国府津小学校のプール、貯水槽などの施設建設やマンションの建設などに伴って調査が行われる機会も増え、国府津三ツ俣遺跡が弥生時代から江戸時代までの大規模な複合遺跡であることが分かっています。近年では、森戸川の河川改修に伴い発掘調査が行われ、遺跡の範囲がさらに南東側へ広がっていることが確認されています（第XX・XXII地点）。

現在、遺跡周辺は市街化が進み、遺跡の面影を感じることはほとんどできなくなっていますが、国府津三ツ俣遺跡は神奈川県下でも有数の規模の遺跡として知られています。

年代		時代		おもな出来事	市内の遺跡と本書で紹介する事例など		
近・現代	近世	中世	古代				
六〇〇〇年前	一五〇〇年前	一三三八	一一九二	千代台地がかたち作られる 細石刃が日本列島全体に広まる 土器・石織の使用が始まる 定住化の進行 気候温暖化により海面が上昇（縄文海進） 東日本で環状集落がつかられる 北部九州に水稲耕作が伝わる 鉄器や青銅器の使用が始まる 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける 卑弥呼が魏に使いを送る 前方後円墳の築造が始まる 倭の五王の時代が始まる 仏教伝来 前方後円墳の築造停止 大化の改新 大宝律令の完成 平城京へ遷都 因分寺建立の詔 平安京へ遷都	谷津山神遺跡		
二三〇〇年前頃	五〇〇〇年前	一四六七	一一九三			縄文時代 草創期 早期 前期 中期 後期	羽根尾貝塚
二二九	二〇〇	一四六〇	一〇〇〇			飛鳥時代	久野一本松遺跡
二二四	一五〇	一〇〇〇	七〇〇			奈良時代	前川山王前遺跡
五三八	一〇〇	七〇〇	七〇〇			鎌倉時代	中里遺跡
六四五	七〇〇	七〇〇	七〇〇			平安時代	集落の始まり（5頁） 千代南原遺跡
七〇一	七〇〇	七〇〇	七〇〇			鎌倉時代	前方後方形周溝墓（10頁）
七四一	七〇〇	七〇〇	七〇〇			室町時代	久野下馬下遺跡
七九四	七〇〇	七〇〇	七〇〇			南北朝時代	久野古墳群
一一九二	七〇〇	七〇〇	七〇〇			近世	木葉類土器（13頁） 石組遺構（16頁） 千代寺院跡 海辺の集落（21頁）
一九四五	一九四五	一九四五	一九四五	江戸時代	井戸跡（22頁） 下堀宮ノ脇遺跡 久野中世集石墓		
一九四八	一九四八	一九四八	一九四八	江戸時代	下曾我遺跡		
一八五三	一八五三	一八五三	一八五三	江戸時代	掘立柱建物跡（25頁）		
一八六八	一八六八	一八六八	一八六八	江戸時代	小船森遺跡		
一七〇七	一七〇七	一七〇七	一七〇七	江戸時代	小田原城八幡山古郭 下堀方形居館 小田原城地構 小田原城地構 史跡小田原城跡 小田原城下関連遺跡 早川石丁場跡		
一五九〇	一五九〇	一五九〇	一五九〇	江戸時代	安土桃山時代	豊臣秀吉の小田原攻め	
一六〇三	一六〇三	一六〇三	一六〇三	江戸時代	徳川家康、江戸幕府を開く	史跡小田原城跡	
一四六〇	一四六〇	一四六〇	一四六〇	江戸時代	富士山宝永の大噴火	早川石丁場跡	
一八五三	一八五三	一八五三	一八五三	江戸時代	ベリール乗航	汽車土庫（28頁）	
一九四五	一九四五	一九四五	一九四五	江戸時代	五箇条の誓文の公布、明治改元 太平洋戦争終結		

第1表 関連年表

## II 国府津三ツ俣遺跡のプロローグ

### 1 生活のはじまり（縄文時代～弥生時代中期）

現在までに国府津三ツ俣遺跡で、縄文時代の遺構は確認されていません。縄文時代の人びとは、東側の大磯丘陵を生活の主な場としていたことが推定されます。縄文土器片と石鏃や打製石斧といった石器が少量見つかり、人びとが低地で活動した際に残した遺物の可能性も考えられます（写真2）。

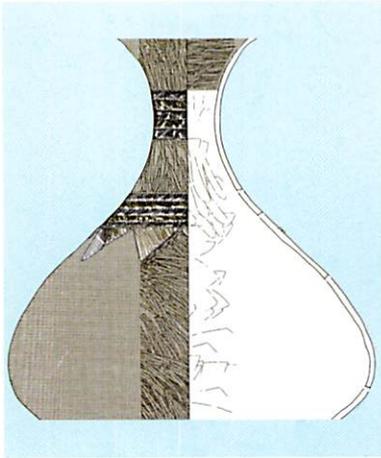


写真2 縄文時代の土器・石器（神奈川県教育委員会提供）

弥生時代に入ると、中期初頭や中里遺跡が造られた時期にあたる中期中葉（須和田式期）の土器も検出されていますが、人びとの生活が本格化するのには、中期後半（宮ノ台式期）のことです。後世の遺構に破壊されていることもあり、あまり検出数は多くありませんが、第Ⅲ地点などの遺跡の南側で住居跡も確認されています。弥生時代中期の遺構・遺物は、国府津三ツ俣遺跡の南側に広がる町畑遺跡や小八幡東畑遺跡でも確認されており、人びとは国府津三ツ俣遺跡よりも海側で生活を始めた可能性が考えられます。

国府津三ツ俣遺跡からは、最古の段階を除きほぼ中期後半の全期間にわたる土器が出土しています（第3図）。土器の分析からも、中期後半に国府津三ツ俣遺跡で継続的な人びとの生活が始まったといえるでしょう。

また、土器のほかにも、この時代を特徴づける石器も出土しています（写真3）。第Ⅶ地点では、弥生時代中期のものとして推定される側面にえぐりの入った両刃の石斧が見つかり、類例のない珍しいものとして注目されます。第Ⅹ地点では、弥生時代中期後半の土器とともに磨製石剣が出土しています。丁寧に表面が研磨され、刃の部分も鋭く仕上げられています。小田原市内では、ほかに高田北之前遺跡第Ⅱ地点で磨製石剣の出土事例があります。



第3図 第Ⅲ地点出土宮ノ台式土器  
(S=1/10) (伊丹ほか1986)

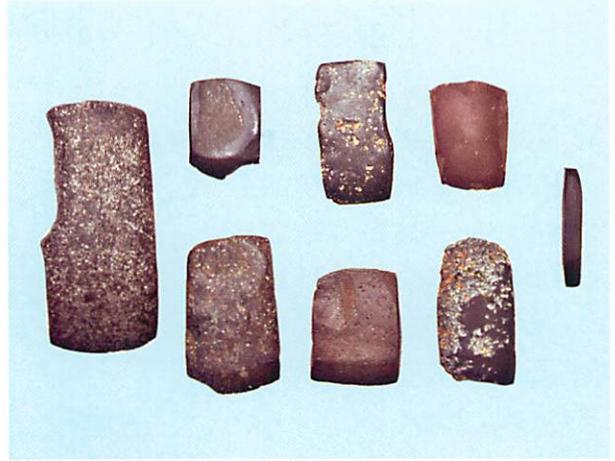


写真3 弥生時代の石器 (富永ほか1999)  
(左端: 第Ⅱ地点出土側面挟入両刃石斧)

## 2 大規模集落の登場と集落を囲む溝 (弥生時代後期～古墳時代前期)

3世紀前半頃の弥生時代後期になると<sup>たてあなじゆうきよ</sup>竪穴住居が多く造られるようになります。古墳時代前期にはさらに活発化し、三ツ俣の地に大規模な集落が営まれるようになります。このような状況は、森戸川右岸の台地上の永塚、千代、高田の遺跡でも認められるもので、森戸川流域の遺跡群に共通する傾向といえることができます。

この時期の住居が検出されている調査地点は、第Ⅲ・Ⅴ・Ⅺ・Ⅻ・Ⅼ地点で、主に遺跡の北東側を中心に分布しています。特に第Ⅴ地点などでは、竪穴住居が密集して検出されていることから、<sup>ひんぱん</sup>住まいの場として頻りに土地が使われていたようです。

一方で、第Ⅲ地点では調査区の南側半分で住居跡は検出されず、第Ⅼ地点でも調査区の北側半分で住居跡が検出されていません。住居跡の分布からは、明確な土地利用の違いが認められます。それを裏付けるように第Ⅲ地点、第Ⅼ地点ともに居住域の内側と外側を隔てる大きな溝が見つっています。



写真4 第Ⅱ地点:H11号竪穴住居跡出土土器  
(富永ほか2000)

第Ⅲ地点の調査では、調査区の中央を横断するように大型の溝（H1号自然流路）が検出されました（写真5）。溝の底には砂が堆積し、水が流れていたことが考えられます。また、底には井戸のような掘り込みがあり、水汲み場としての機能もあったようです。下層からは、古墳時代前期の土器が集中して見つかった場所もあります。

第Ⅲ地点では、調査区を横断するように東西方向の溝（SD024）が検出されています（写真6）。最下層の遺物から弥生時代中期後葉につくられた溝と考えられていますが、長い年月をかけて埋まり、最終的には古墳時代前期頃まで機能していたことが推定されます。この溝と同一のものと考えられる溝（SD030）が、第Ⅵ地点でも見つかっています。

また、第Ⅷ地点で検出されている南北方向の溝（7号溝）も同一の役割を果たしていた可能性が考えられます。これらの溝は、堅穴住居が広がる範囲をぐるりと取り囲むように位置しています。

調査範囲が部分的なこともあり想像の域を出ませんが、集落の東側を流れる森戸川と合わせて、居住域を取り囲む環濠かんごうのような溝が張り巡らされていたことが推定されます。第4図の黄色く示された部分が堅穴住居跡、青く示された部分が居住域を囲む溝です。国府津小学校の校庭にも、集落を取り囲んだ大型の溝の続きが、千年以上の時を経て、眠っているのかもしれませんが。



写真5 第Ⅲ地点：H1号自然流路  
（東から）（富永ほか2000）



写真6 第Ⅲ地点：SD024（東から）  
（伊丹ほか1986）



### 3 方形周溝墓の展開

それでは居住域の外側は、どのような光景が広がっていたのでしょうか。

第Ⅲ地点の調査では、先ほど紹介したSD024と呼ばれる溝の南側で、古墳時代前期の方形周溝墓が複数検出されています。第Ⅵ地点の調査でも、SD030の外側に方形周溝墓が見つかっていることから、溝に区画された居住域の外側には、方形周溝墓が連なるお墓の空間が広がっていたことが推定されます(第4図：紫色部分)。居住域と墓域は溝ではっきりと区画され、墓域は遺跡の西側と南側に広がっていたようです。第Ⅲ地点や第Ⅹ地点の方形周溝墓は、方向をある程度揃えて造られていることから、計画的に墓が造られていた可能性も考えられます。

方形周溝墓は、埋葬施設のある主体部を中心に四角く溝をめぐらせたもので、中心部には土を盛り上げた墳丘があったと推定されますが、国府津三ツ俣遺跡では、残念ながら墳丘は見つかっていません(写真7)。被葬者はどのような人物だったのでしょうか。

居住域と墓域の区分けが意識されていた一方で、第Ⅲ地点の調査では、SD024の北側でも方形周溝墓(SX006・007)が見つかっています。この方形周溝墓は、本来居住域であった場所に位置し、古い時期の竪穴住居跡を壊して造られています。遺跡の南側を中心に広がっていた墓域が、ある段階に拡大して居住域へ進出したことで、居住域が墓域へと変化したことが考えられます。そのため、竪穴住居跡は、国府津小学校周辺の第Ⅴ地点や第Ⅻ・Ⅼ地点などで繰り返しくられるような傾向が確認されています。このような居住域であった場所が墓域へと変化する現象は、千代遺跡群でも認められています。



写真7 X地点：1号方形周溝墓（北東から）（近藤ほか1991）



写真8 XXI地点：前方後方形周溝墓  
(北から) (山口ほか2011)



写真9 XXI地点：前方後方形周溝墓出土遺物

さらに第XXI地点では、方形周溝墓とはやや異なるかたちの墓が発見されています(写真8)。検出された遺構は古墳時代前期初めのL字形の溝で、<sup>ぜんぽうこうほうけいしゅうこうぼ</sup>前方後方形周溝墓の周溝と考えられています。前方後方形周溝墓は、古墳が出現する過渡期に位置づけられる遺構で、古墳文化の始まりを考える上で、とても重要な意味を持っています。

第XXI地点の前方後方形周溝墓は、隣接する第XV地点で続きが確認されていないことから、後方部が10~12m程度の規模が推定されています。周溝の底よりやや浮いた位置から、焼く前に土器の底に穴をあけた壺(「<sup>ていぶせんこうにじゅうこうえんづぼ</sup>底部穿孔二重口縁壺」)や土器の口の部分からくびれの部分にかけて細

かい刻みの線で文様を描いている小型の壺が検出されています(写真9)。これらの土器は、墓で行われた祭祀儀礼(さいしぎらい)に関係するものと考えられ、当時の社会を考える上でも重要な資料です。

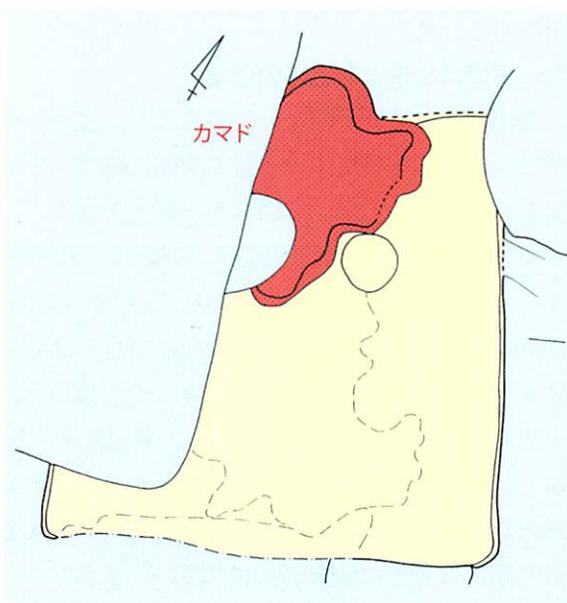
### Ⅲ 古墳時代の集落と墓域

#### 1 古墳時代中期の集落

古墳時代前期の集落は、神奈川県内においても中期まで継続するものは少数ですが、国府津三ツ俣遺跡の場合、住居の数は減少するものの中期まで継続して営まれています。古墳時代前期から住居の数が激減する理由は明らかではありません。第Ⅲ地点などで竪穴住居跡が複数検出されていることから、遺跡の北部で当時の人びとは生活をしていたと考えられます。

#### 2 古墳時代後期の集落

古墳時代後期になると、再び集落が活気を取り戻すように竪穴住居の検出例が増加します。集落の中心は、国府津小学校周辺の遺跡中央部にあったことが推定されます。この時期の竪穴住居は、煮炊き用の厨房施設であるカマド<sup>ちゅうぼう</sup>を基本的に備え付けています。後期の竪穴住居跡を多く検出している第Ⅲ・Ⅴ地点の竪穴住居跡の分析からは、国府津三ツ俣遺跡の場合、住居の北側にカマドを設置することが一般的であったことが分かっています。北側にカマドを設ける場合でも、カマドの主軸方向がやや東向きになるものと西向きになるものの二者が存在し、東向きのもの方がより新しい時期のものであることが分かりました。このことにより、ほとんどの住居が東向きにカマドを据えている第Ⅲ地点の住居の方が西向きカマドの多い第Ⅴ地点の住居より新しく、集落の中心が第Ⅴ地点から海寄りの第Ⅲ地点の方へ変遷していることが明らかとなっています。



第5図 カマドの軸が西向きの竪穴住居 (S=1/60)  
(伊丹ほか1986)

一方で、第XIII地点の北側など堅穴住居の検出されない遺跡の北部では、多くの溝が検出されています。溝の機能は明確ではありませんが、溝の底に砂がたまり水が流れていたような痕跡があることや、井戸のような深い筒状の穴が溝の底で見つかることから、耕作地の水利施設の可能性があります。溝はいくつか重なって見つかり、複数の時期のものが含まれていると判断されます。古墳時代後期になり、新たな耕作の場として、比較的地下水位の高い遺跡の北側を当時の人びとが選択し、利用したことが想定されます。

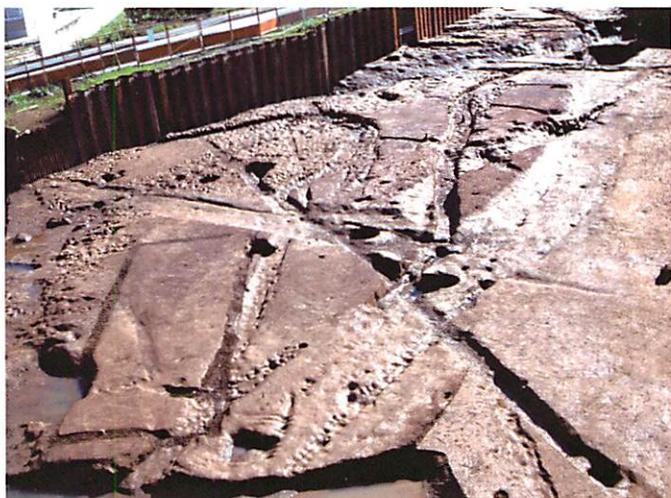


写真10 第XIII地点:溝(北西から)(富永ほか2000)

### 3 古墳の出現と有力者の登場

海岸に近い第Ⅲ・X・XX・XXII地点など、遺跡の南部では、古墳が造られていたことが明らかとなっています。遺跡の南部に墓域が造られる分布は、古墳時代前期の方形周溝墓群と共通する傾向といえます。

現在までに、古墳時代後期の古墳は5基検出されています(第4図:緑色部分)。後世に土地が利用されたこともあり、いずれも墳丘は残っておらず、古墳の周囲をめぐる周溝だけが検出されています(写真11)。周溝のかたちから古墳はいずれも円墳で、最大でも直径25m程度の規模であったと推定されます。

周溝の配置から、それぞれの古墳は間隔を開けており、造営に際し位置関係を意識した配置がされている可能性があります。第X・XXII地点の調査では、周溝の上や墳丘のあった周溝の内側で奈良・平安時代の堅穴住居跡が見つかることから、その時期にはすでに墳丘が失われていたようです。

古墳時代後期の国府津三ツ俣遺跡には、古墳を築造することのできた有力者がいたことを示しています。



写真11 第X地点:第1・2号古墳(東から)(近藤ほか1991)

#### 4 周溝から出土した土器

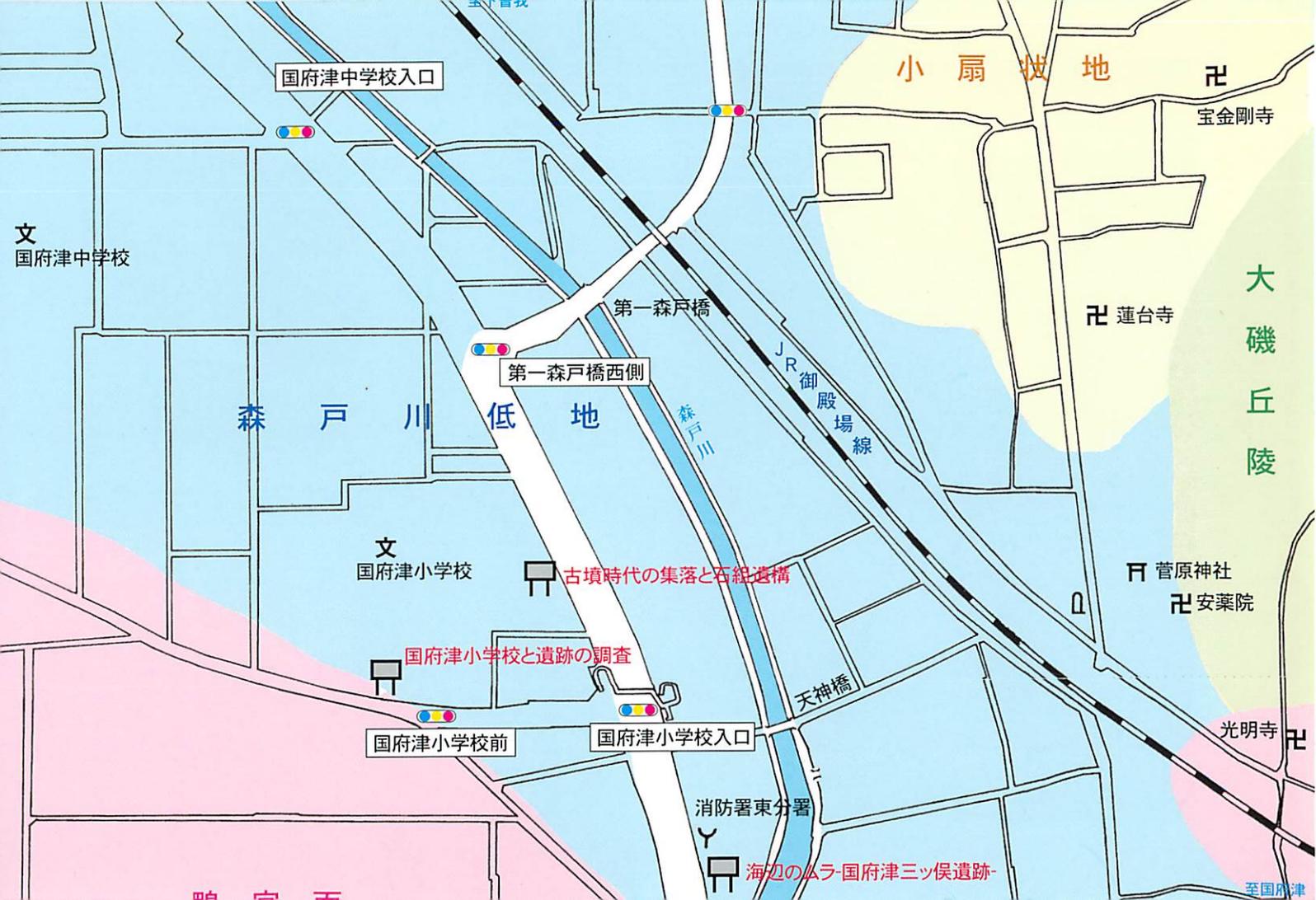
埋葬施設のある墳丘が失われてしまっているため、明確に副葬品と呼べるようなものは見つかりませんが、第X地点の1号古墳の周溝内からは、土師器の坏がまとまって出土しています。

出土した土師器坏は、土器に用いられた粘土の質や茶褐色の土器の色合いなど、共通する特徴がいくつかみられます。なかでも、底の部分に木葉痕と呼ばれる製作段階でつけられた葉脈の跡が残っていることが特徴的です(写真12)。

出土状況からは、完形品に近い坏を周溝に一度に大量に廃棄している様子が想定されます。古墳で行われた祭祀儀礼の状況を考える上で重要な調査成果となっています。



写真12 X地点:第1号古墳出土土器



国府津中学校入口

小扇地

宝金剛寺

文  
国府津中学校

第一森戸橋

蓮台寺

大磯丘陵

第一森戸橋西側

森戸川低地

JR御殿場線

森戸川

文  
国府津小学校

古墳時代の集落と石紀遺構

菅原神社  
安薬院

国府津小学校と遺跡の調査

国府津小学校前

国府津小学校入口

天神橋

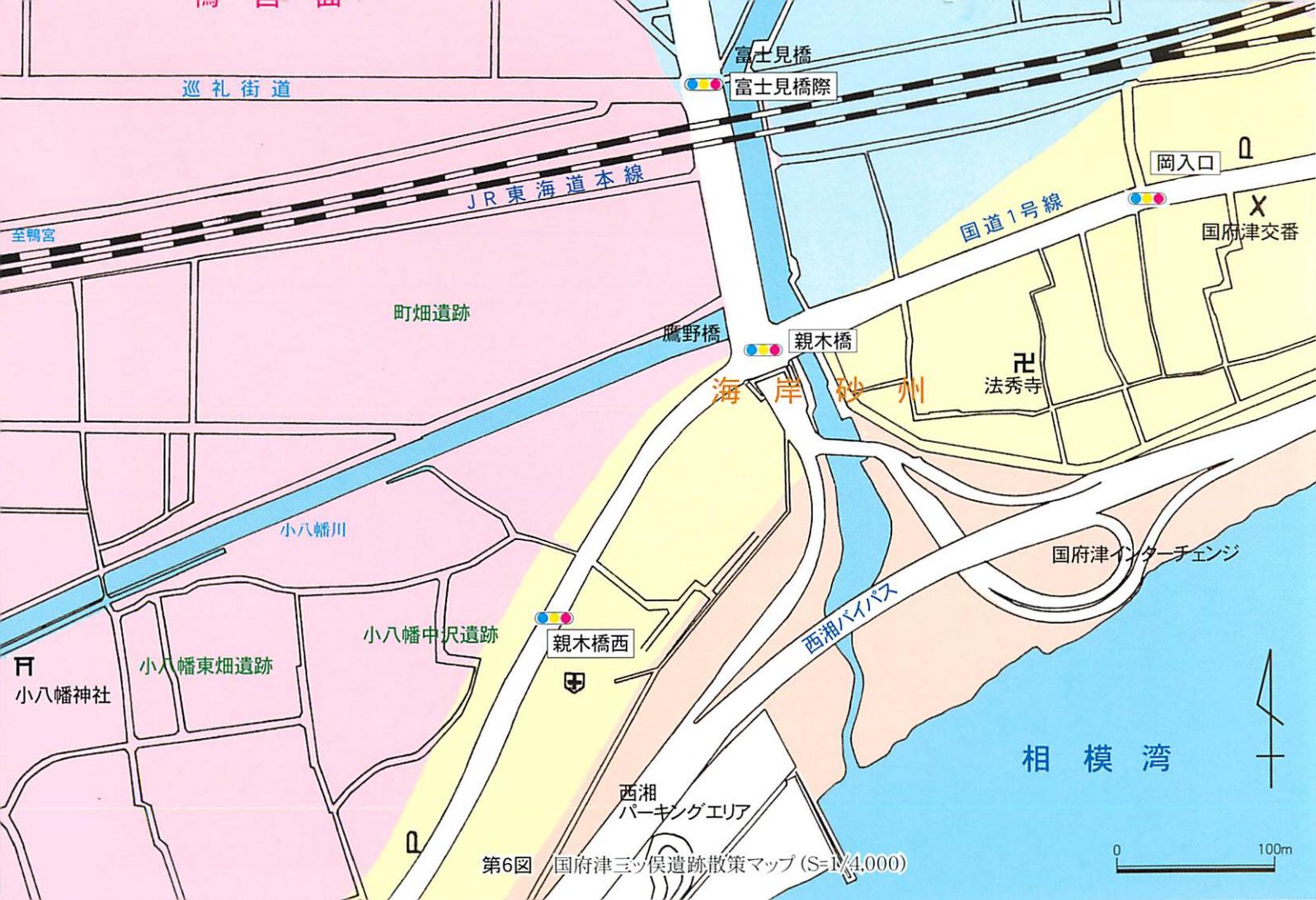
光明寺

消防署東分署

海辺のムラ-国府津三ツ俣遺跡-

鳴宮五

至国府津



巡礼街道

富士見橋

富士見橋際

岡入口

国道1号線

国府津交番

JR東海道本線

至鴨宮

町畑遺跡

鷹野橋

親木橋

海岸砂州

法秀寺

小八幡川

国府津インターチェンジ

小八幡中沢遺跡

親木橋西

西湘バイパス

小八幡神社

小八幡東畑遺跡

相模湾

西湘  
パーキングエリア

第6図 国府津三ツ俣遺跡散策マップ (S=1/4,000)

0 100m

## 5 祭祀場の調査

古墳時代の終わり頃にあたる7世紀後半の特殊な石組遺構が、第Ⅺ地点の調査で見つかっています（表紙写真・写真13）。

発見された石組遺構は、およそ南北9.3m×東西6.5mの長円形の範囲にぎっしりと約30～60cmの厚さで河原石が敷き詰められていました。石組遺構の北側は、造り替えによって若干高く石組がされ、北東隅から井戸が検出されました。

井戸は南北2.3m×東西2.1mの範囲を一度掘り下げた後、スギなどの木材を組み合わせて四角い井戸枠を作り、構築されていました。井戸の南側の石敷き面との境には、スギを用いた仕切り板による区画があり、西側は石を積み上げて壁のようなものを作っています。また、井戸の東側には、幅1mの玉砂利敷きの水路が調査区外へ向かって延びています。

石組遺構の構築および使用時期は、出土遺物から7世紀中頃～末であったと考えられています。出土遺物のうち、井戸の周辺では7世紀中頃のものと推定される須恵器、土師器の完形品や大型破片がまとまって出土しています（写真14・15）。上下に折り重なるように出土し、河原石とともに一括して廃棄されたような状況を示していま



写真13 第Ⅺ地点:石組遺構・井戸跡周辺遺物出土状況（北西から）（山本ほか、2000）

した。また、石組遺構の南側では、モモ・ウリ・ヒョウタンなどの食用果実類の種子などが出土していることも注目されます。

一方で、井戸枠の底からは、8世紀の初めの須恵器が出土しており、井戸枠自体は造り替えられながら、8世紀の初め頃まで使用されていたと考えられます。

古墳時代後期の井戸を伴う石組遺構は匹敵する規模のものが県内ではほかに例がありません。須恵器が大量に出土していることも注目されます。構築時に大量の河原石を運び込み、敷き詰めるためには、一定以上の労働力の確保が必要であることなどから、豪族などの地元の有力者が構築したものであることが想定されます。石組遺構の作りが丁寧であること、大量の須恵器類が周辺で廃棄されている状況などからは、日常的な施設でなく、水場における祭祀を行うような場所であったことが考えられ重要です。

第XX地点でも、古墳時代後期の井戸状の石組遺構が見つかっており(写真16)、水場の祭祀の様相が明らかになることが期待されています。



写真14 第XII地点:石組遺構出土須恵器甕・坏  
(山本ほか1999)



写真15 第XII地点:石組遺構出土須恵器  
甕・壺・高坏・平瓶 (山本ほか1999)

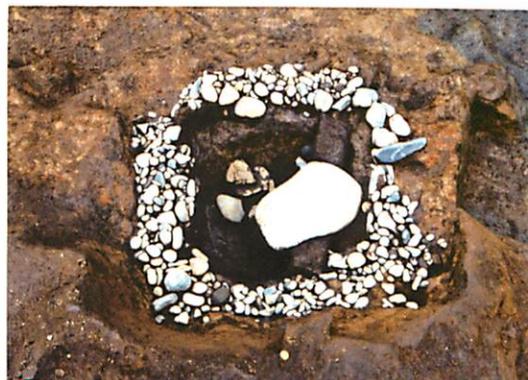


写真16 第XX地点:K1号石組遺構 (西から)  
(大上ほか2003)

## 6 出土品が語る古墳時代の生活

古墳時代に主に用いられた土器は、素焼きで茶褐色の土師器と、窯でより高温で焼かれた灰青色の須恵器の2種類がありました。土師器は縄文土器や弥生土器と同じような伝統的な焼き方による土器ですが、古墳時代の間にもカマドの登場といった生活スタイルの変化に合わせて形や種類を変化させています。須恵器は当時の高等技術を用い、特定の場所でしか生産されないために貴重品であったと考えられます。土師器の中にも日常的に用いるのではなく、祭祀儀礼に用いるために作られたものが出土しており、集落の様子を考える大きな手掛かりになります。

国府津三ツ俣遺跡からは、土器のほかにも、海辺に近い集落の人びとの生活を示すような遺物として、土錘どすいや石錘せきすいといった漁撈具ぎょらうぐが出土しています。

環状土錘かんじょうどすいとは、粘土を棒に巻きつけるなどして作った円筒形の土製品で、網おもりの錘として使われたと考えられています（写真17）。石錘も同様に網の錘と考えられています、扁平な石の端を打ち欠いた打欠石錘うちかきや、こぶし程度の大きさの石の一部にくびれを作り紐掛け部分にした有頭石錘ゆうとうなど複数のタイプが見つかっています（写真18）。また、ドーナツ型をした環状石錘は、製作途中の未製品が、第Ⅲ地点で多く見つかっており、ムラの中で製作が行われていたことが考えられます。軽石製の浮きも見つかっていることから、相模湾での漁撈活動に用いられたのではないでしょう。

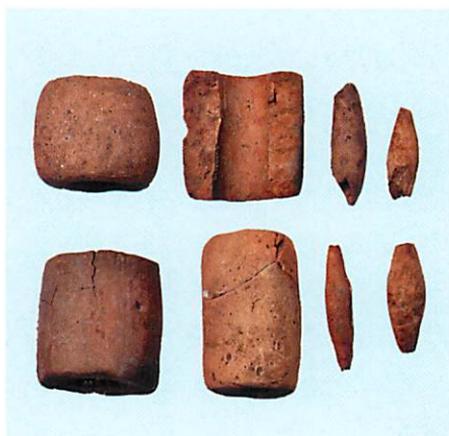


写真17 環状土錘（富永ほか1999）



写真18 石錘と浮き（富永ほか1999）

また、国府津三ツ俣遺跡周辺での生業活動を示す遺物として、木製の農具を挙げることができます。通常、木製品は土中に埋没している間に腐ってしましますが、第Ⅻ地点からは、大足と呼ばれる田下駄が出土しています。国府津三ツ俣遺跡の集落周辺の湿田で、体が沈みこまないように使われたものと考えられます。このほか、農具の柄の一部と考えられる製品、櫛、琴状製品、曲物容器の底や蓋の部分に当たる板、ほぞ穴のある建築部材、杭などバラエティーに富んだ木製品が見つかっています（写真 19）。櫛にはツバキ属の木を用いていますが、多くはスギ材を樹種に選択しているようです。



写真19 第Ⅻ地点：木製品（山本ほか2000）  
（縮尺不同）

通常は古墳などで見つかることの多い装飾品も数多く出土しています（写真 20）。金銅製のイヤリングである耳環、石製の勾玉や管玉などが見つかっています。勾玉や



写真 20 装飾品（富永ほか1999）

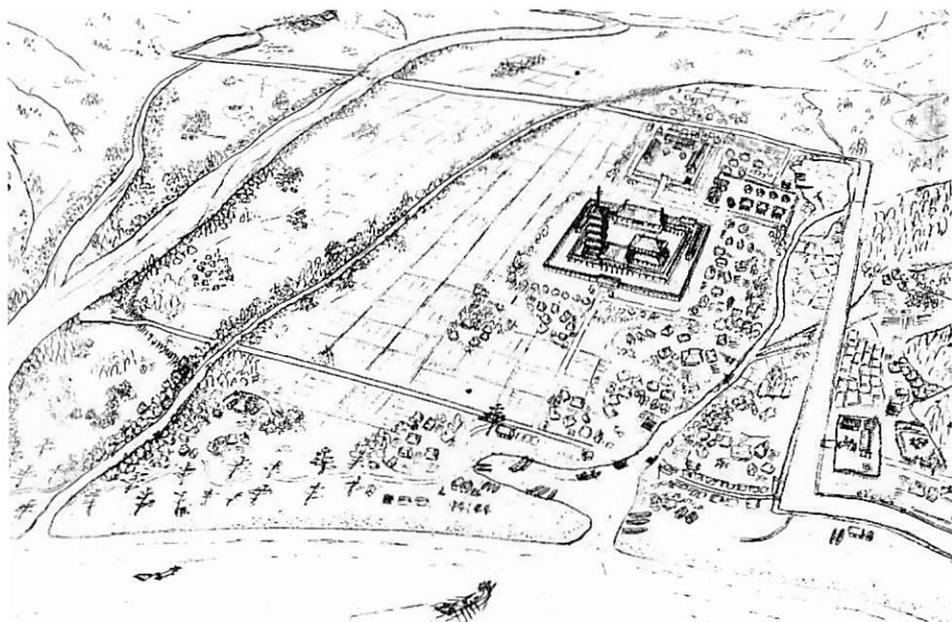
管玉の中には木製品が含まれることから、玉造りの工房のようなものが集落の中にあっただのかもしれませんが。また、銅製の馬具である環鈴は、本来三つの鈴が付いていた「三環鈴」と推定されるもので、遺跡の南側の古墳に副葬されていた可能性も考えられます。

## IV 海辺の拠点集落（奈良・平安時代）

### 1 古代交通の要衝

奈良時代に成立した律令国家は、中央集権的な国家体制確立の一環として、道路網の整備に努めました。道路網を整備することで、国からの命令伝達や地方の情報収集、税の迅速な輸送などを円滑にするねらいがありました。都と地方を結んでいたのが七道と呼ばれる幹線道路で、そのうち相模国には東海道が走っていました。小田原市内では、古代東海道の遺構は確認されていませんが、近年、平塚市内でその一部が複数の調査によって明らかにされています。

七道には、道路を往来する官使に対して、<sup>まきば</sup> 駅馬の乗り継ぎや食料の支給を行うとともに、休憩・宿泊施設の機能を提供する<sup>まきば</sup> 駅家が、三十里（およそ16km）ごとに設置されるよう規定されていました。延長5（927）年成立の『延喜式』によれば、相模国には「坂本」「小総」「箕輪」「浜田」の4つの駅家がありました。このうち、相模国最初の駅家である<sup>さかもとのうまや</sup> 坂本駅家は、南足柄市関本に比定されています。2番目の<sup>おぶさのうまや</sup> 小総駅家に



第7図 奈良・平安時代の国府津三ッ俣遺跡周辺の様子（原画：大島慎一）

については、10世紀に成立した『大和物語』のなか「小総の駅といふところは海辺になむありける」という一節があることから、小田原市域の海岸部に位置していたと考えられています。官道は平野部分では直線的に延びていたとされるため、坂本駅家を過ぎた後、足柄平野を直線的に東西に横断した古東海道は、郡家や寺院が造営され、足下郡の拠点地域であった永塚・千代の周辺を通り南下するルートが推定されます。

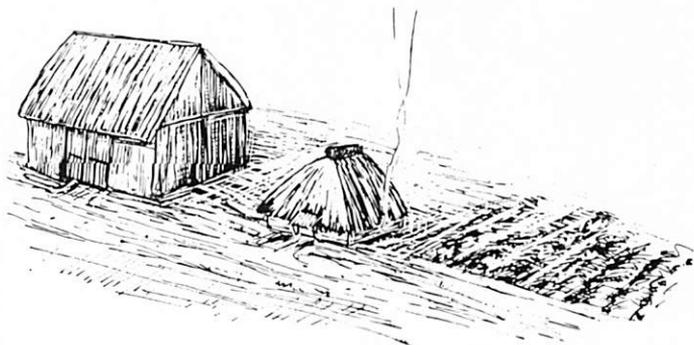
その場合、小総駅家は国府津周辺にあったことが有力視されます。

国府津という地名から、付近が国府の外港（津）であったという考え方が江戸時代後期に成立した『新編相模国風土記稿』にもみられるように、公的な性格を持った港のような機能があった可能性も指摘されています。国府津は、古代東海道が外港の機能をもつような海辺とつながる場所であるとともに、内陸部の拠点である永塚や千代と森戸川の水運を介して関係を持つような場所であったと想定されます。水上交通と陸上交通の結び目、まさに交通の要衝であったと考えられます（第7図）。奈良の都をはじめとして、各地から人や物が往来し、賑わいをみせていたことでしょう。

残念ながら、現在までに小総駅家の痕跡を直接示す遺構は確認されていませんが、今後の調査によって、駅家の建物跡や周囲を囲っていた柵列などの検出が期待されます。相模国の古代史の解明に貢献する大きな可能性を秘めています。

## 2 国府津三ツ俣遺跡の奈良・平安時代集落

奈良・平安時代の集落は、現在の消防署東分署より南側、第Ⅲ地点の南側や第Ⅹ地点で竪穴住居跡や掘立柱建物跡の検出例が増えることから、相模湾をのぞむ集落として栄えていたことが考えられます。第Ⅲ地点の調査では、竪穴住居と掘立柱建物が主軸方向を揃えてひとつのセットとなるような配置がいくつか確認されています（図8）。掘立柱建物が主屋や倉庫、竪穴住居が竈屋となる可能性が考えられます。



第8図 掘立柱建物と竪穴住居の関係（河野ほか・2007）

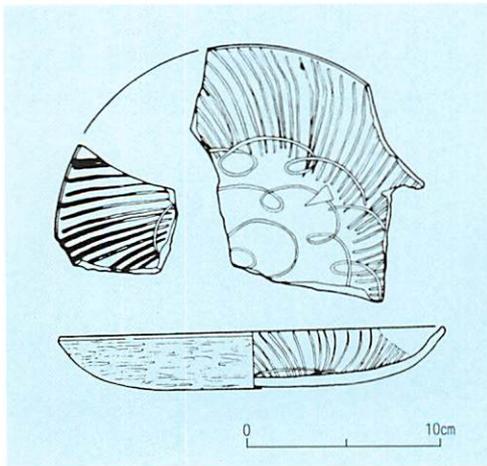
また、平安時代の井戸跡も見つかっています(写真 21)。素掘りの井戸ほか、四角形の井戸枠をもつ井戸が見つかっています。井戸枠のある井戸は、作られた時期によって構造に違いがあることが明らかにされています。周りに住居跡が作られないものもあり、井戸の周囲が共同の広場のような空間であった可能性も考えられています。



写真21 第IV地点:井戸 (SE003) (南東より)  
(伊丹ほか1987)

### 3 特徴的な遺物の数々

古墳時代までと同様に奈良・平安時代においても、土器は土師器と須恵器が主に使われます。土師器は一定の地域ごとに特徴をもつものが使用されるようになります。相模国の土師器は、研究者の間では例えば、碗と皿の中間のような器である坏は、「相模型坏」の名で呼ばれています。これらの在地の土器のほかにも、他地方の土器も国府津三ツ俣遺跡では見つかっています。



第9図 第XII地点:畿内産土師器 (S=1/4)  
(山本ほか2000)

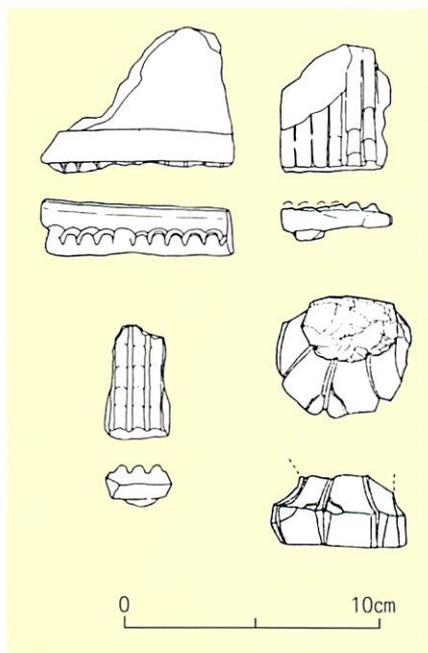
そのひとつに畿内産土師器と呼ばれる近畿地方で生産された良質の土師器があります(第9図)。いずれも破片資料ではありますが、第IV・V・XII地点などで合計15点が確認されています。第XII地点のものがもっとも古く古墳時代後期(7世紀第2四半期)のもので、すでに畿内との交流があったことがうかがわれます。

また、三河、駿東、甲斐、武蔵の各地方で生産された土師器もみつかり、他地方からの活発なモノの動きを観知することができます。

また、植物の灰を釉薬としてかけて焼かれた灰釉陶器には、第Ⅱ地点で碗の底部に「丈」と刻書した10世紀の製品が出土しています（シリーズ4写真21）。「丈」の字は、古墳時代後期には師長国造を担ったとされている有力氏族、丈部氏に関連する可能性が考えられ、その存在を示す資料として大変注目されます。焼成前に文字が刻まれていることから、丈部氏の特注品だったのかもしれませんが。

内陸の千代台地の遺跡群と森戸川を介して関係が深かった国府津三ツ俣遺跡の様子を示す資料も見つかっています。第Ⅲ・Ⅴ地点で出土している瓦塔片は、焼き物で作った小型の塔の屋根や軒先部分の破片です（第10図）。仏教信仰の様子がうかがわれます。獣足付の須恵器壺は獅子の脚を表したものでしょうか。第Ⅴ地点で出土した丸軻は、律令国家の官人が帯飾りとして身に付けていたものです。一般的な集落で出土するものではなく、郡家や寺院などとの関連が示唆される遺物です。

また、出土する鉄製品の量が増加します。鉄鍬や鋨、錠前の鍵のようなものも見つかっており、鉄製品が生活のさまざまな場面で普及していたことが考えられます。



第10図 第Ⅲ・Ⅴ地点：瓦塔  
第Ⅴ地点：獣足（S=1/3）  
（伊丹ほか1986・87）

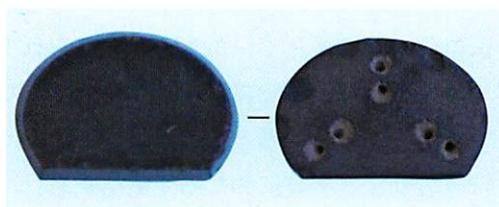


写真22 第Ⅲ地点：丸軻（約2/3）  
（神奈川県教育委員会蔵）



写真23 鉄製品（富永ほか1999）  
（鉄鍬、鎌、鋨、斧、錠）

#### 4 微小遺物から復元される生業と食生活

人びとがどのような生業を営み、何を食べていたのかはとても興味深いところです。第Ⅲ～Ⅴ地点の調査では、竪穴住居跡のカマド内部の土・灰・焼土をサンプリングし水洗選別をすることで、植物の種子や果実、動物や魚の骨の検出に成功しています。分析が行われた古墳時代後期～奈良・平安時代のデータから明らかにされた生業や食生活とは、どのようなものだったのでしょうか。

もっとも多くに検出された植物質食料はコメで、遺跡周辺の低地での水田経営によって得られたコメを主食としていたようです。畑作によるムギなどの雑穀類も補完的に食していたものと考えられます。果物や堅果類は嗜好品として食されていたようです。動物質食料は魚類が圧倒的に多く出土しています。土錘や石錘の存在に象徴されるように、相模湾による漁撈活動で得られたと考えられます。相模湾の魚類相との比較からは捕獲対象を選択していることも推定されますが、秋から春のマイワシ・カタクチイワシの網漁、6～10月の期間内に行われたカツオ漁を中心としていたようです。一方で、鉄鏃など狩猟具も出土していることから、シカ・ウサギなどの陸上動物を大磯丘陵などで捕獲していたことが考えられます。

魚類が主要な動物質タンパク源であったと評価できますが、ムラの人びとは海浜部で生活しているからといって決して漁業に専従していたのではなく、水田・畑作経営、狩猟活動など多岐にわたる生業活動を行っていたと考えられます。内陸部に位置する



写真 24 分析された第Ⅲ地点の竪穴住居 (S1058) (南から)  
(伊丹ほか 1986)

秦野市草山遺跡の分析でも、全体としては同様の傾向が得られており、当時の社会状況などを反映しているのかもしれませんが、カマド内の土から復元されるデータは限定的なものではありますが、通常の調査成果だけでは分からない生活の細部を語ってくれます。

# V 農村としての国府津（中世～近世）

## 1 整然とならぶ建物跡

遺跡北側の第Ⅲ地点の調査では、11世紀代以降と推定される遺構群が検出され、変遷が明らかにされています。小田原市域では中世前半の遺跡の発見例が多くなく、貴重な調査成果といえることができます。

その中でも、12～15世紀代のものと推定される掘立柱建物跡群が注目されます。四面に底が<sup>ひら</sup>付く建物が主屋となり、小型の掘立柱建物や井戸、土坑などが付属し、屋敷地を形成していたようです。建物の位置の分析から3つの時期があったと想定されます。主屋は、当時の建物としては構造が立派で規模も大きなことから、経済力をもった土豪などの屋敷地であったと考えられます。遺物は、一般の集落ではあまり出土しない<sup>せいじ</sup>青磁、<sup>はくじ</sup>白磁などの中国産陶磁器のほか、国産陶磁器、下駄、箸、椀などの木製品、<sup>とうす</sup>刀子や毛抜きなどの金属製品が、建物群の周辺から見つかっています。

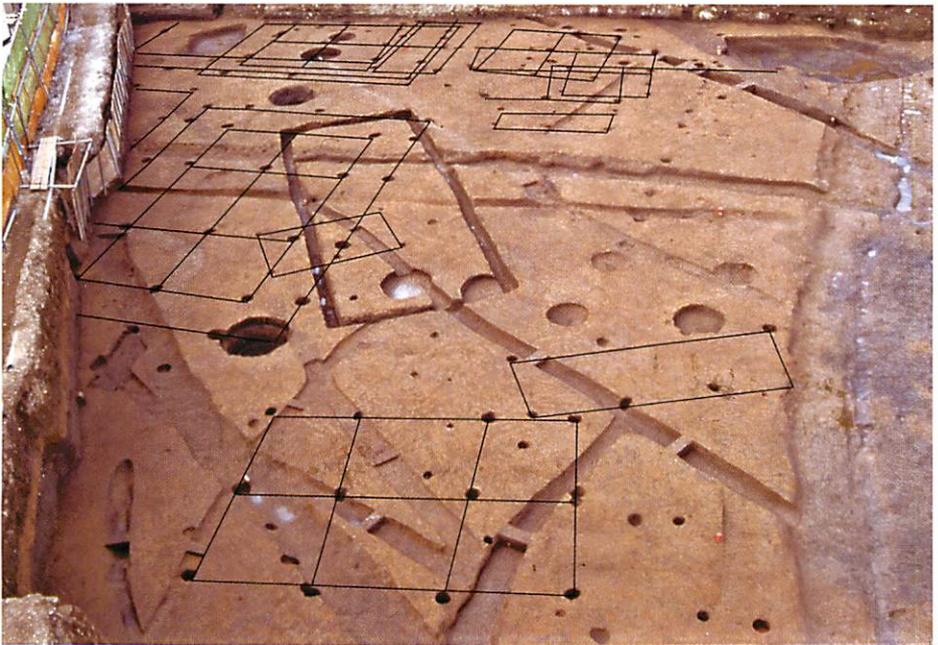


写真25 第Ⅲ地点：掘立柱建物跡（南から）（富永ほか2000）





写真26 第Ⅲ地点:中世の中国産陶磁器  
(富永ほか2000)



写真27 第Ⅲ地点:中世の木製品  
(富永ほか2000)

近世の耕作地としての土地利用は、遺跡の南部でも確認されています。第ⅡⅡ地点では、南北方向に走る畝状の溝が検出されました。土壌サンプルの花粉分析の結果からは、ソバ属やアブラナ科の栽培植物の畑作が行われていた可能性が指摘されています。この畝状遺構の北側、第ⅡⅡ地点の調査では、東西方向に走る区画溝と考えられる深さ1m以上の大型の溝が見つっています。溝の側面は、板材や炭化させた丸太を杭で固定し護岸されていました。また、溝に直交して2本の丸太を並列させて作った橋も検出されています(写真28)。地上へ至る階段などの施設は見つかりませんが、江戸時代の人びとが行き来した様子が伝わってきます。



写真28 第ⅡⅡ地点:区画溝(C1号溝状遺構)と橋  
(東から) (大上ほか2003)

### 3 近代鉄道交通の拠点

1887(明治20)年に東海道本線が国府津駅まで開業すると、国府津は近代交通の拠点となりました。1920(大正9)年に丹那トンネルが開通し、国府津―熱海間の営業が開始されるまでは、箱根・熱海方面の観光客の玄関口となり、大いに賑わうこととなりました。また、政財界の要人の別荘地としての一面もありました。明治16年測量の迅速図からは、当時の集落は現在の国道1号線沿いが中心で、国府津三ツ俣遺跡周辺は田園風景が広がっていたことが、読み取れます。

最後に、鉄道交通との関わりを示す遺物として、汽車土瓶をご紹介します。汽車土瓶は駅売り弁当用の茶瓶として使用されたもので、土瓶本体と蓋、付属品の湯呑みのセットで構成されます(写真29)。駅弁会社「東華軒」の経営する農園の跡地を調査した第X地点やその東側に位置する第XX地点の調査では、汽車土瓶が多く出土しています。土瓶の胴部には「国府津」「こふづ」「こうづ」などと文字が書かれています。東華軒は国府津発祥の会社で、竹皮包みの握り飯を販売品目として1888(明治21)年に創業しています。出土した汽車土瓶は、東華軒が国府津駅で弁当と一緒にお茶を販売するための製品のうち、未使用の製品をストックしていたものか、破損した製品を廃棄したものと考えられます。



写真29 第XX地点:汽車土瓶(大上ほか2003)

## 文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。国府津三ツ俣遺跡をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 伊丹 徹ほか 1986 『三ツ俣遺跡(第1分冊)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 13  
1987 『三ツ俣遺跡(第2分冊)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 13
- 大上周三ほか 2003 『三ツ俣遺跡(H地区)』かながわ考古学財団調査報告 158、かながわ考古学財団
- 河野喜映ほか 2007 『東人の世界—発掘された神奈川県の奈良・平安時代』神奈川県教育委員会・山北町教育委員会
- 小林公治 1991 「古代集落の食生活と生業」『古代』92号、早稲田大学考古学会、321-368
- 小林公治ほか 1991 「三ツ俣遺跡出土の動植物遺体とその考古学的コンテクスト」『神奈川考古』第27号、神奈川考古同人会、141-158
- 近藤英夫ほか 1991 『国府津三ツ俣遺跡』国府津三ツ俣遺跡調査団
- 樋泉岳二 1991 「相模湾沿岸域における古代漁撈活動の動物考古学的検討」『史観』125冊、早稲田大学史学会編、66-81
- 富永樹之ほか 1999 『発掘されたいこしえの国府津 三ツ俣遺跡』かながわ考古学財団  
2000 『三ツ俣遺跡(G地区)』かながわ考古学財団調査報告 81、かながわ考古学財団
- 山本暉久ほか 2000 『三ツ俣遺跡(F地区)』かながわ考古学財団調査報告 80、かながわ考古学財団
- 山口剛志ほか 2011 『国府津三ツ俣遺跡XXI地点』小田原市文化財調査報告書第158集、小田原市教育委員会
- 渡辺 外ほか 2008 『三ツ俣遺跡(I地区)』かながわ考古学財団調査報告 218、かながわ考古学財団

小田原の遺跡探訪シリーズ6

### 国府津三ツ俣遺跡

— 相模湾をのぞむ集落遺跡 —

平成23年3月14日 印刷

平成23年3月24日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: [bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp](mailto:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp)

印刷 有限会社サンヨー

